清貧の人・カンガス神父

一日、「パッタンバン友の会だより」が届いた。パッタンバン友の会は、カンボジア・アフリカを支援する会で、その中心であり、リーダーはイエズス会のルイス・カンガス神父である。

スペイン人のカンガス神父は今年九十歳。一九五一年に来日され、もう六十六年も日本で神父として働いておられる。長い間、東京のイグナチオ教会の主任司祭として活躍され、二〇〇七年に山口教会に赴任、そこで初めて出会った。

明るく、いつも笑顔でユーモアあふれる会話で人々から愛され、私も会ったばかりなのに何十年来の知り合いのような気分になる。イグナチオ教会時代にNHKの大河ドラマ「黄金の日々」に宣教師フロイス役で出演されたことを知り、この巡礼の道の七十四話で「フロイスを演じた神父」と題して書いた。

その後、二〇〇九年に支援されているカンボジアへのスタディー・ツアーに誘われ、これも百六十五話から十八回にわたって連載した。関心のある方は私のホームページに掲載しているので読んでほしい。

ところで、前回「清貧に生きる」を書いたが、マザー・テレサのように清貧の中で、社会の弱い立場の人たちのために働く生き方と、日本に古くから伝わる「清貧の思想」との間に、似てはいるが異なるものを感じ、その続編を書こうとした矢先に「パッタンバン友の会だより」が届いたのである。

記事の中でカンガス神父は「九十歳になってもアフリカやカンボジアの貧しい人々のところに行かれるのはなぜ？」という質問に「現地の子供が元気に立派に育っているのを見ると、逆に私自身が育てられ、体の元気と心の喜びに満たされます」と言われる。

私は喜寿を越えた後期高齢者とよく口にするが、カンガス神父は九十歳になるのに、毎年のようにカンボジアに出掛け、貧しい地域にたくさんの幼稚園や学校を建て、アフリカでも貧しい子供を支援する活動をされている。それも若い高校生、大学生や私のような大人を連れてのスタディー・ツアーで、現地を体験する機会を与え、すでに二十回近く実施している。

「パッタンバン友の会だより」の中には、ツアーに参加した若者の感想がたくさん載っているが、今の日本では体験できないものを感じているようだ。

昨年、カンガス神父からプレゼントされた「喜びをもって主に仕える」を読む。改めて感じたことは、カンガス神父の中には貧しい人にしてあげるというものがない。あるのは、その人たちと共に歩み、そのことに心から喜びを感じながら、自分が貧しい人々に育てられているとまで言われる。

日本の清貧の思想の生き方をみると「孤高な生き方」を感じる。どちらが良いとか、悪いというのではなく、キリスト教の清貧の生き方の中には「共に生きる」ことを感じる。

こんな身近にカンガス神父のような清貧に生きている人がいるのがうれしい。文章のあちこちにある「喜びと感謝」という言葉が、私の清貧という生き方に輝きを与えてくれる。

右端がカンガス神父

友の会会員にプレゼントされた本